柔整・接骨史

◆『柔道接骨学総論（下巻）』と稲葉太郎・北泉勝臣 ― 災害救護の記述をめぐって ―

高輪整形外科クリニック　杉澤　あい

【key words】稲葉太郎、北泉勝臣、柔道接骨学総論、柔道整復師、災害医療

【Abstract】

近年、各地で大規模な自然災害が発生する中、災害時における柔道整復師の役割についても改めて検討されている。過去の災害においては、柔道整復師が個人として、あるいは救護班を組織して被災地に派遣された事例が、これまでの調査から確認されている。昨年度の接骨史分科会フォーラムでは、こうした災害時における柔道整復師の救護活動について報告した。その調査の過程で、昭和２年の奥丹後地震に際して救護班員として被災地に派遣された北泉勝臣が、昭和９年に稲葉太郎と共著で『柔道接骨学総論（下巻）』を著し、その中で災害救護について記述していることに着目した。同書は、柔道整復師の業務や医学的知識のみならず、災害時の救護についても扱っている。そこで本研究では、『柔道接骨学総論（下巻）』における災害救護の記述に着目し、その著者である稲葉太郎と北泉勝臣の経歴や活動を調査するとともに、同書において災害救護が取り上げられた背景について検討した。【COI】開示すべき利益相反はない。【倫理的配慮】本発表は、公刊資料、制度情報または分科委員会活動の概要を扱うものであり、個人を対象とする研究データ、診療情報および個人情報を取り扱わないため、倫理審査は非該当である。

◆忍性による社会福祉事業

接骨医学史研究会　飯田　英代

【key words】忍性、信貴山、ハンセン病、弱者救済、土木事業

【Abstract】

鎌倉時代の僧・忍性は、師である叡尊の思想を受け継ぎ、多岐にわたる社会福祉事業を行った。ハンセン病患者の救済のためにハンセン病療養所を設立した。当時の社会的偏見や感染への恐れに対し、自ら病人の体を洗い、背負って町に出て物乞いをさせることにより自立させた。生活困窮者や社会的に否定された人々の救済を行った。橋をかける、井戸を掘る、道路を作るなどの土木事業を行い民衆の生活向上に貢献した。人間だけではなく、軍馬の療養施設、つまり日本初の動物愛護施設も設立した。弱者に寄り添い続けた忍性は行基の再来と称賛され、日本の社会福祉の先駆者と称された。その行動は医療、福祉の基本的理念の原点と言える。本研究では忍性の行った社会福祉事業とその意義を現代と比較して考察したい。【COI】開示すべき利益相反はない。【倫理的配慮】本発表は、公刊資料、制度情報または分科委員会活動の概要を扱うものであり、個人を対象とする研究データ、診療情報および個人情報を取り扱わないため、倫理審査は非該当である。

◆切られお富は全身の切り傷をなにで治したのか

東京都　荒川　政一

【key words】江戸時代、切創、膏薬、外科的縫合、歌舞伎

【Abstract】

【背景・目的】切られお富とは、幕末の元治元年(1864 年)に江戸で初演された、歌舞伎『処女翫浮名横櫛(むすめごのみうきなのよこぐし)』に登場する主人公の名である。お富は妾であったが、他の男と密通したことが旦那に知れ、全身を刀で切り刻まれる。大量の出血で瀕死の状態となるが、奇跡的に一命をとりとめ三年後には元の旦那をゆすりに行くという筋書きである。全身に切り傷を負い、大量出血をした瀕死のお富が、なぜ回復することができたのか。どのような処置を受けたのか。歌舞伎の台本によると「膏薬」「七十五針」とある。膏薬というと、骨折や打撲・捻挫という非開放性損傷に使うというイメージがあるが、江戸時代には、開放性損傷である切創に膏薬が使われていたのだろうか。また切創を外科的に縫合するということが、江戸時代に行われていたのだろうか。切られお富は歌舞伎の世界の話ではあるが、江戸時代の切創の治療について、医学史的に検証してみたい。【方法】江戸時代の膏薬・外科について史料を検証した。【結果】江戸時代には、切り傷等の開放性外傷に対して膏薬が使われ、縫合を行う外科的処置が行われていた。【考察】昨年から今年にかけて、『国宝』や『木挽町のあだ討ち』という、歌舞伎を題材にした映画がヒットし、歌舞伎に注目が集まっている。歌舞伎は、台本が作成された初演時の町人の生活や考えをうかがい知ることが出来る。今回歌舞伎の初演台本を読むことにより、医学史を医療者の立場からではなく、町人の立場から見ることができた。【COI】開示すべき利益相反はない。【倫理的配慮】本発表は、公刊資料、制度情報または分科委員会活動の概要を扱うものであり、個人を対象とする研究データ、診療情報および個人情報を取り扱わないため、倫理審査は非該当である。

◆変幻自在に変化する脱臼整復法と華岡流整骨術

茨城県　福田　　格

【key words】春林軒免状、華岡流整骨術、肩関節脱臼整復法、伝承

【Abstract】

令和 8 年夏、恒例の日本柔道整復接骨医学会接骨史分科会会員と接骨医学史研究会合同の夏期研修会は和歌山の華岡青洲史跡探訪をした。春林軒の資料の中に、十分に研鑽を積んだ塾生に免状が与えられており、記録に残る免状の写真を見ると、習得すべき医療分野は 1、内外治法 1、金創治法 1、産科奥術 1、整骨術とある。免状については先行研究がされているが、華岡青洲は整骨術をどの時期に習得したのであろうか、整骨術分野について再考することとした。青洲が京都遊学した時期は 1782 年から 1785 年の 23 歳から 26 歳の頃とされる。江戸幕府は田沼意次の政策によって比較的自由に蘭学が学べた時代に重なる。華岡流整骨術は門弟たちが編述した『青洲華岡先生整骨法図説』を筆頭に多数存在する。特に印象を惹くのは図解である。中でも肩関節脱臼整復法の図解を見るとパレの外科書を手本に編纂された紅夷外科宗伝や吉原元棟系統の正骨範に見られる手法との類似性が理解できる。楢林鎮山によってパレの外科書を手本に編纂された紅夷外科宗伝が 1706 年、蘭方は一部の人にのみ筆写伝承された時代である。1746 年には中国の専門書を中心に翻訳編纂された骨継療治重宝記が、1759 年に山脇東洋によって蔵志が出版され、1774 年には解体新書初版が出版されている。資料によると外科の分野は大和見水(見立)にカスパル流外科、伊良子流外科を学んでいる。青洲がどの時期にどのような方法で整復術を習得したのか。先行研究によると長崎遊学もしているという。パレの整骨術はどのように世界中に伝搬したのだろうか華岡流整骨術に到る系譜を文献をもとに再考した。【COI】関連して、開示すべき利益相反はない【倫理的配慮】本発表は、公刊資料、制度情報または分科委員会活動の概要を扱うものであり、個人を対象とする研究データ、診療情報および個人情報を取り扱わないため、倫理審査は非該当である。